

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350040

研究課題名(和文) 震災被災者の復興過程で生ずる生活問題へのアクションリサーチ法による解決方法の追究

研究課題名(英文) Investigation on the reconstruction process of the resolving life problem by the earthquake disaster victim through the action research

研究代表者

大竹 美登利(Otake, Midori)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：40073564

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災により生活基盤を失われた石巻市の人々の生活課題を把握し、その解決の道筋を被災者と共に考え活動することによって生活が再建していく過程をアクションリサーチ法によって調査し、生活再建に必要な要因を明らかにした。
具体的には、ボランティア団体等への調査から、被災者のニーズとそれを支援する組織が時期によって変化していく状況を把握し、作成したブックレットを活用して復興に向けた地域の協力関係を作るとともに、高校生の生活や進路等の意識や行動への影響の調査を実施し、将来の進路にも影響を及ぼしていることが明らかとした。

研究成果の概要(英文)：We surveyed life problems of the people in Ishinomaki-City, who lost their basis of livelihood due to the Great East Japan Earthquake Disaster in 2011, observed the process of life reconstruction by action research method by considering the pathway of problem solving and acting together with the sufferers, and elucidated factors necessary for the life reconstruction of victims. Specifically, we investigated the changes in the need of victims and in the composition of supporting organizations according to the phases of reconstruction period by interviews on volunteer groups. We used a booklet about defense against disasters we published to establish a cooperative relationship with inhabitants and with volunteer groups. We also investigated the influence of the Great East Japan Earthquake Disaster on the life, future perspective and action of high school students in and around Ishinomaki-City. life and course, etc. and also have an influence on future course.

研究分野：家政学

キーワード：東日本大震災 生活研究 石巻 被災者 生活復興

研究課題名 震災被災者の復興過程で生ずる生活問題へのアクションリサーチ法による解決方法の追求

1. 研究開始当初の背景

震災が多発する日本では、震災と生活再建に関する研究がこれまでも行われてきた。例えば、玄海島の震災での暮らしと住まい¹⁾や中越大震災後の生活の再建²⁾など、それぞれの震災での生活研究が進んでいる。特に近年の最大級の震災であった阪神淡路大震災に関しては、長期にわたって研究が進められてきた^{3) 4)}。これらの研究では、人間関係が希薄な都市型コミュニティにおける震災後の仮設住宅での地域相互扶助関係の形成が大きな課題となった。

今回の東日本大震災は、規模においても、地震に津波や原子力発電事故が加わった複合災害という点でも、阪神淡路大震災を上回る。また東日本大震災は地域相互互助関係が残る島嶼地域、漁業地域、農業地域、あるいは大都市地域であるという点で、大都市地域で起こった阪神淡路大震災とは相違し、その生活再建のプロセスはまた違った特徴を持つと思われる。また、複合災害であり経済基盤が脆弱な地域で起きた東日本大震災は、仮設住宅・復興住宅建設、交通・インフラなどの公共事業への大規模な財政の導入等による経済の急速な回復によって急速な生活再建をはたした阪神淡路大震災とは相違している。実際、震災後4年を経過していても未だに復興の道筋は見えず、生活再建のめどは立っていない。

東日本大震災後の被災者の研究は、すでに震災ボランティアシステム、コミュニティの再生と新しい公共、震災と公共サービス、協同組合の可能性、災害情報デザイン、震災時の公共サービスコストとリスク、生活再建とコミュニティづくり、国民視点からの生活復興への提言、震災における雇用失業問題など、多くの分析や提言が行われている。しかし、具体的な衣食住の質と量や家族などの人間関係をトータルに把握した研究は少ない。

2. 研究の目的

本研究では、衣食住や人間関係といった生活全体を総合的に把握する学問の特長を生かし、生活の諸問題を具体的に把握しそれらの相互関連の分析を軸に生活を総合的に捉え、実践学としての家政学の特徴をいかして被災者への支援を行いながら、生活再建のプロセスを明らかにすることとした。すなわち東日本大震災により生活基盤を失われた石巻市の人々の生活課題を把握し、その解決の道筋を被災者と共に考え活動しながら、生活が再建していく過程を追跡調査し、生活再建に必要な要因を明らかにすることを目的とした。具体的には以下の3点から追究する。

(1)仮設住宅入居者への繰り返しの生活支援活動を通じた生活課題の変化を把握する

仮設住宅入居者への生活支援活動を行いながら、インタビューなどで生活課題やその変化を把握し、仮設住宅

における生活再建のプロセスとその課題を明らかにする。

すなわち、衣食住の生活創造活動のイベントを定期的開催し、そこに参加する被災者の家族やライフストーリーといった個々の生活状況の相違による生活課題を把握し、それぞれの事情に応じた生活再建方を提示し、生活支援活動を行う。こうした活動のそれぞれの場面でインタビューを行い、明らかになった生活支援活動の課題に基づいた生活再建の方策の再提起を繰り返しながら、生活再建の課題が変化していく状況を明らかにする。

(2)仮設住宅から復興住宅への移行に伴う生活課題の把握と新たな支援策の明確化

今後、仮設住宅から復興住宅への転居が計画されている。被災者の個々の生活状況の相違によって、復興住宅へ転居するもの、復興住宅以外に転居する者など、様々な道をたどる。これらの被災者を対象に、仮設住宅居住時、復興住宅移行時、復興住宅移転後の3つのステージ毎に、生活再建のプロセスを事例的に追跡調査することによって、仮設住宅から復興住宅への移行に伴う生活課題の把握と、それに見あった生活支援策を明確化する。

(3)個々の生活事情の相違による生活再建課題の相違

生活再建していく過程で解決すべき課題が生まれてくるが、その課題解決方法を住民と共に考え解決方法を提案し、一緒に実践していきながら、その生活の変化のプロセスを明らかにする。

3. 研究の方法

石巻市の開成団地、南境団地の仮設住宅の居住者を対象に、住民の要望にそった調理教室や手芸教室などの生活支援活動を行って、住民一人一人に関わりながら、参加者にインタビュー調査を実施して生活課題を把握し、その解決の道筋を共に考え活動しながらインタビュー調査を行うことによって、生活再建プロセスを把握する。

2015年頃には仮設住宅から復興住宅への移転が予定されていたことから、仮設住宅居住期、住民が復興住宅へ徐々に移行していく時期、復興住宅に移転後の3つのステージにわけて、生活課題の変化を把握する。

4. 研究成果

研究の成果は単行本や学会等での研究発表によって公表した。なお、単行本『東日本大震災 ボランティアによる支援と仮設住宅』の章構成は以下のようであり、研究成果の全体像を収録している。

序章 日本家政学会東日本大震災生活研究プロジェクトスタート

第1章 石巻の被災状況と石巻専修大学の取り組み

1. 石巻市の被災と避難の状況 - 阪神・淡路大震災との比較

2. 東日本大震災後の石巻専修大学の活動

第2章 ボランティアの生活支援活動からみる被災者の生活実態

1. 石巻復興支援協議会のボランティア活動

2. ボランティア団体へのインタビューからみる生活復興過程

3. 生活課題対応型の支援からみる被災者ニーズ

第3章 日本家政学会による支援活動

1. 生活支援活動としての料理教室・手芸教室・子育て教室の取り組み

2. NGOピースポートによる炊き出し支援の献立分析と提案

第4章 仮設住宅居住者の生活実態

1. 石巻市街地の仮設住宅居住者の生活実態

2. 石巻市郡部地域に居住する被災者の生活状況に関する調査

第5章 支援を通しての今後の展開

(1)仮設住宅入居者への繰り返しの生活支援活動を通じた生活課題の把握

震災直後から被災者への実態把握、ニーズ把握の調査が大量に行われ、住民は調査疲れを起し、拒否反応があった。プライベートに関わる生活研究は住民との信頼関係を作った上ではじめて成り立つことから、信頼関係を作ることが必要であった。そこで、住民への支援と関わらせて被災者との間に信頼関係を構築した後に、調査研究を行うという方法を取った。

これまで見ず知らずの人と隣人として生活するようになった仮設住宅居住者は、お互いにつながり合うための場面を手芸や調理などの教室を開催するなど作りたいたいの希望があった。そこで、住民の希望に沿って、手芸教室や料理教室を開催することにした。

<料理教室>

料理教室は「宮城の郷土料理を、よく知る高齢者から若年者へ伝承する」ことを目指し、1回目(おくずかけ・ずんだ餅) 2回目(はらこ飯・松葉汁)を、プロジェクトメンバーから仮設住宅住民に教えるスタイルで行った。しかし参加者の年齢層が高く、郷土料理を作っていた人が多く、「郷土料理の伝承」の必要は無く、特に仮設住宅で作る環境になくなった参加者がそれを継承する希望が強いことが把握された。そこで、仮設住宅住民を料理教室の指導者とし、郷土料理を大学生に指導してもらい「被災者による」料理教室「石巻の正月料理(雑煮・ひき煮しめ・柿なます)」を2013年12月に開催した。被災者が生き生きとする姿、また地元の食文化を知らない若者(大学生)がはじめて知る楽しさを共有できる教室であった。この教室の実施にあたり、仮設住宅住民への事前の聞き取り調査、事前の実習(買い出し、調理、動画撮影・記録、試食)を経て、郷土食をレシピ化できた。こうした取り組みを重ねていくことで、埋もれた郷土料理を掘り起こす取り組みの一端を実現できた。

これらの経験から、仮設住宅での暮らしの長期化が郷土料理の消失につながることを把握したことから、地域の生活文化を収集し復興支援につなげる活動が必要であることが明らかとなった。そこで、まず第1に、各家庭

に伝わっている地域の特徴ある料理を収集し、その記録をレシピという形で残すこととした。情報収集し冊子作成の準備中であるが、完成には至っていない。

第2は、震災によって疲弊した産業の復興と若者への伝承を図るために、高校生など若者を取り込む形で石巻市の名産品である若布創作料理のコンテストを行い、この結果を冊子にまとめ配布した。家政学会員と石巻市内の高校や石巻市行政関係者、生産者、加工業者、流通業者などの産業復興に関連の方々に協力頂き、生活者と生産者のコラボレーションのしくみを作った。

この結果を冊子にまとめ、配布し、地域の生活文化の見直しと産業復興を目指すと共に、生活復興・産業復興への見通しと課題を明らかにするために、参加者へインタビューを行った。インタビューの結果は今後まとめていく予定である。

第3は、生活復興と産業復興に向けた取り組みを探るための、伝統的な生活文化に根ざした産業の掘り起こしである。少しずつ再建してきた商店を主な対象として、再建の道のりをインタビューした。そこでは地域の人々との繋がりが強い伝統的な商店が比較的安定的に復興している状況が明らかとなった。これらを踏まえて、今後は伝統文化を活かした生活復興の方策を明らかにし、アクションに繋げていく予定である。

<手芸教室>

仮設住宅住民を中心に継続して手芸教室を行った。それを通して、思い出の衣服を一度に失った喪失感と将来の希望を持たない被災者の姿を把握できた。被災者の癒やしにはつながったが、さらなる復興の手がかりは得られなかった。しかし、乳幼児を抱える親のいるNPOの団体では、組紐の手芸教室から国際会議の名札ストラップの作成の委託に結びつけ、仕事支援につなげることができた。

この取り組みの中で生活復興には仕事支援も重要であるが、実現には多くの課題があり、その課題を整理し、生活復興における仕事支援の在り方を整理する必要があることが明らかとなった。

<ボランティア団体の要望に応じて>

生活復興の過程を被災者に直接調査することは、被災者への負担が大きいため、本研究では被災者の生活支援にたずさわっているボランティア団体等に対し、活動内容のインタビューを実施することで被災者の状況等を把握した。その過程で、インタビューを実施したボランティア団体のひとつから、本PJへの要望として、ボランティア養成にあたり、指導用テキストの作成、炊き出しでの衛生に対する基礎知識養成のためのテキスト作成、自分たちが取り組んできた炊き出しの評価とメニューの提案の3つが挙げられた。

これを受けて、第1に、震災後半年にわたり行われた炊き出しメニューのメモをデータとして、栄養などの評価分析を行い、学会誌に論文として掲載された。概要は以下である。

分析対象としたP団体はかつて経験したことのないような甚大な被害をもたらした東日本大震災において、宮城県石巻市の被災者へ、約半年間にわたって11万食あまりの炊き出し支援を行った。

ここで提供された炊き出しメニューで調理されていた料理は、白飯(117食)、煮物(81食)、具沢山汁(73食)、浅漬け(51食)、和え物(45食)などであり、被災者へは被災者が不足しがちな野菜を積極的に料理を提供していた。一食あたり料理品数は、初期の3月では単品が大半で、最終期の9月では2品が多くなっていた。

温かい料理は、炊き出しを開始した3月から4月では32.4%、4月から5月中旬では23%と、5月下旬から9月は1割弱と、寒い季節は汁物などの温かい料理が多く提供され、季節による配慮がなされていた。

栄養評価「食事バランスガイドを活用した栄養教育・食育実践マニュアル」の基準値に対する充足率から評価を行った。その結果、主食、主菜、副菜は充実した期間もあったが、牛乳・乳製品、果物は充足しており、また、果物などのビタミン源も不足しており、栄養的なバランスは偏りがあったといえる。各料理区分のSV数を乗じて得られたエネルギー量の合計は450kcalで、基準の600kcalを下回っていた。

以上、炊き出し食において、被災者に不足していると報告されていた野菜類を積極的に活用して提供していたことは、大変な評価に値すると考えられる。また、いち早く温かい料理を提供し、また炊き出しが軌道に乗った時期には複数献立を多く提供するなど、被災者へ心を尽くした配慮もなされていた。

栄養評価では、たん白質が不足している可能性がある期間が多かった。それはたん白質食品と野菜類を組み合わせた献立が多かったためである。また、複数献立が多くなり、主食、副菜、主菜の栄養バランスが優れていた期間ではエネルギーは充足していたが、牛乳・乳製品、果物は期間を通してわずかであったことが栄養的なバランスに偏りを生じていた。さらに、炊き出し初期と最終期は栄養が不足していたことと、魚類の提供が少なかったこともあげられた。

これらの課題に対して、肉類、魚類を主として用いた献立、牛乳・乳製品、果物を提供する献立、また、食料供給がスムーズにできない場合においても栄養補給しやすい献立、また、微量栄養素が摂取できる以下のような食材の活用を行った。

肉類、魚類を主とした献立：たん白質充足への対応については、缶詰や既製品の積極的な活用
長期保存の可能なロングライフ牛乳やスキムミルク等の活用による牛乳・乳製品の活用
提供が難しいフレッシュな果物の代わりに缶詰やドライフルーツ、100%果汁のジュースなどの活用
エネルギー不足には、糖分やドライフルーツが添加してあるシリアル、高エネルギーの種実類、個別包装のマヨネーズ、ドレッシング等を活用

ビタミン・鉄・カルシウム強化米やビタミン飲料、電解質転嫁飲料などの活用による微量栄養素の補給

第2に一般ボランティアが大量調理の衛生管理手法を理解し実践するためのテキスト(マニュアル)として、ブックレット『炊き出しのための衛生マニュアル』を作成した。第1部の「衛生のきそ・きほん」では食中毒とその予防の4原則を解説、さらに身だしなみや手洗い等の個人衛生管理の重要ポイントもイラストや平易な表現でわかりやすく記載、第2部の「衛生マニュアル～準備から撤収まで～」では、準備と確認 出発前のごしらえ 出発時・移動時・到着時 現地での準備 調理 食事の提供 あと片付け・ゴミ処理・帰ってから、の順で衛生管理のポイントを示した。準備・計画から帰還までの一連の活動をイメージしながら、衛生上管理するべきこと、やってはいけないことなどを直感的に理解することができるテキストである。炊き出し者が本テキストで学び、自信を持って食事提供を行い、そして被災者の食の安全・安心に貢献されることを期待する。

このブックレットはボランティア団体が活用すると共に、熊本地震の際に厚労省のHPなどで広報し、炊き出しボランティアに広く活用してもらっている。

(2)仮設住宅から復興住宅への移行に伴う生活問題の把握と新たな支援策の明確化

<仮設住宅住民調査>

開成地区や南境地区で、「お茶っこ」や手芸教室などの仮設住宅住民へのボランティアを通して、何人かの住民との関わりができた。これらの人々は復興公営住宅に移住しつつある。復興公営住宅に移住し落ち着いたところで、改めてインタビューやアンケート調査などを行いたいと思っている。復興公営住宅への移転が予定より遅れており、復興住宅移住者への調査は、今回はまだ行えていない。

(3)個々の生活事情の相違による生活再建課題の相違

まず、被災者を直接調査対象とせず、ボランティア団体を対象としたインタビュー調査を行い、被災からの復興過程の被災者のニーズの変化を把握した。

ボランティア団体20団体と石巻市社会福祉協議会、石巻市役所を対象にインタビューした結果、「緊急時」「復興直後」「避難所期」「仮設住宅期」で被災者の支援ニーズが相違し、支援団体の支援内容や組織が変化していったことが明らかとなった。

<緊急期：直後～数日後>

震災発生直後、多くの被災者は避難所で過ごすことになったが、着の身着のまま避難してきた方も多く、食料品、衣服、生活用品などの不足が大きな問題となった。

<復旧期：数日～6カ月後>

避難所での集団生活、ライフラインの途絶による劣悪な環境、通常の医療を受けられない状況などから、慢性

疾患の悪化、感染症や伝染性疾患の蔓延、PTSD などへの対応が求められ、看護サポートは 24 時間体制で必要な状況であった。衛生面のサポートとして、避難所の清掃や、入浴支援、ダニ対策なども開始された。また、避難所には遊び場が少なく子どものストレス及び保護者自身へのサポートのために、遊び道具の提供や遊び場づくりが提供された。

避難所の運営体制の整備が求められるようになり、震災直後の市職員中心の運営から被災者中心に変化していった。

また、被災地復興のために、道路の泥かきやがれき撤去が行われるようになった。また、津波で車を失った被災者も多く、移動サポートのニーズが高まった。震災発生 1~2 カ月後までは、病院、避難所、自宅等の往復などに移動、2~3 カ月後は葬儀関係での移動、4 カ月頃からは障がい者や高齢者の移動であった。

<復旧期 : 6カ月~1年後>

震災発生から 1 カ月半がたった 2011 年 4 月末から仮設住宅入居が開始され、仮設住宅で新たに使用する家具・家電等の物資支給や引っ越しサポートが行われた。

仮設住宅での第 1 の問題は馴染みのない地域での情報不足であり、情報誌の発行、配布、それに付随して居住者の安否確認が行われた。また見知らぬ同士の仮設住宅でのコミュニティ形成も重視された。また、ごみ捨て場の管理や駐車場利用のマナー、集会所の利用など、新しい住区のルール作りが必要となった。さらに暖房設備や風除室の設置、水道の凍結対策など、仮設住宅の不備の改善のために住民の意見を集約し行政に提案していくための自治会の形成が必要となった。

<復旧期 : 1~2年後>

震災発生から 1 年経過すると、被災に伴う失業手当の受給終了し、就労支援が重視されるようになった。女性の就職サポートのための一時保育などの支援団体も出てきたり、起業に向けての勉強会の開催や情報提供、起業ファンドの設立などが開始された。

<復興期 : 2年後~>

震災発生から 2 年が経過すると、復興公営住宅が建設されはじめ、自宅の再建者も出てきた。その一方で、住宅再建の見通しが立たない被災者も多く、生活状況および必要な支援の種類や程度は多様化し、画一的な支援で対応できなくなってきた。また、震災発生直後の泥かきやがれき撤去などのニーズは減少し、コミュニティの形成、就労支援、復興まちづくり支援へと支援内容が専門化し、個別の対応が必要となった。

<学校教育における課題>

インタビューを続けながらニーズの変化を把握する中で、教育関係者へのインタビューを通じて、被災した子ども達のその後の影響について実態を把握したいという学校側の意向もふまえ、「東日本大震災による高校生の生活や防災及び進路等の意識や行動への影響」調査を実施することとなった。

対象者は石巻市内の 10 の高等学校の 1~3 年生(一部 4 年生)、1210 人である。震災時の居住地は旧石巻市内が 4 割、次に松島 2 割弱で、学校の所在地もほぼ同じで、震災後の通学は困難になったとする者が 2 割いた。

震災時 7 割の者が学校におり、その後は 4 割の者がしばらく避難所に滞在したが、5 月には避難所は 1 割、自宅でない住宅は 2 割となり、現在は仮設住宅・災害復興住宅 1 割、震災時とは別のところに 2 割が移住していた。

被害については、地震の被害だけが 3 割弱、地震と津波が 4 割強と多くの人々が地震と津波の被害を受け、その住まいに住めなくなる、修理しないと住めない者が合計で約半数にのぼっていた。また一緒に住む家族数が増減した者が 2 割おり、また 2 割強が友人関係も変化し、生活が大きく変わった。

震災後にボランティアの支援を受けた者が半数おり、ボランティアに参加した者も 3 割おり、ボランティアが身近な活動になっていた。また、防災学習をもっとしておきたかったと考えており、家庭での震災の備えの重要性を強く感じていた。震災後、家族とのつながりが深まり、防犯意識が高まっていた。

6 割を超える者が今回の震災が自分の進路や将来に影響を与えたとしており、将来の職業でも、石巻の主な産業である「漁業関係」だけでなく、活躍が目立った「医療・福祉」や「公務員」「教育関係」を希望する者が多くなっていた。震災によって自宅や学校が被災し、家族や友人などの人間関係が変化し、また、将来の進路にも影響を及ぼしていることが明らかとなった。

これらの結果は報告書にまとめ協力校に配付し、生徒指導に活用して頂いた。

<引用文献>

- 1)後藤隆太郎他、日本建築学会研究報告.九州支部.3,計画系(49),145-148
- 2)水村容子他、学術講演口蓋集. E-2, 建築計画 II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育 2010, 77-78
- 3)黒宮亜希子他、被災者の生活復興過程に見る 4 つのパターン : 2001 年・2003 年・2005 年兵庫県生活復興パネル調査結果報告、地域安全学会論文集 (8), 405-414, 2006-11
- 4)木村玲欧他、社会調査による生活再建過程モニタリング指標の開発 : 阪神・淡路大震災から 10 年間の復興のようす、地域安全学会論文集 (8), 415-424, 2006-11

5. 主な発表論文

〔雑誌論文〕(計 1 本)

- 1)奥山みどり, 小川宣子, 坂田隆, 大竹美登利, 佐々井啓, 中島明子, 浜島京子, 生田英輔, 吉井美奈子, 萬羽郁子, 三沢徳枝, 山崎泰央, 石原慎士, 李東勲, 宮野道雄, 久慈のみ子, 加藤浩文, 野田奈津実, 東日本大震災におけるボランティアによる炊き出しメニューの栄養評価からみた献立提案の試み』『日本家政学会誌, 査読有, 66

巻4号, 2015年, pp.158-166

〔学会発表〕(計5件)

- 1)野田奈津実他 料理教室と料理コンテストによる「郷土の味」の伝承と提案 - 参加者の意識・意欲の変化 -、日本家政学会第67回大会 2015年
- 2)萬羽郁子他、災害ボランティアの東日本大震災被災地支援に関する調査 - 第1報 石巻市における支援内容の時系列変化 -、日本家政学会第65回大会、2013年
- 3)吉井美奈子他、災害ボランティアの東日本大震災被災地支援に関する調査 - 第2報 石巻市における子どもへの支援 -、日本家政学会第65回大会、2013年
- 4)生田英輔他、災害ボランティアの東日本大震災被災地支援に関する調査 - 第3報 石巻市の被災状況と支援形態 -、日本家政学会第65回大会、2013年
- 5)奥山みどり他、東日本大震災におけるボランティアによる炊き出しメニューの調査 - ピースポートの場合 -、日本家政学会第65回大会、2013年

〔図書〕(計3件)

- 1)日本大震災生活研究プロジェクト著、調査報告書、東日本大震災による高校生の生活や防災及び進路等の意識や行動への影響、2015年、24
- 2)大竹美登利、坂田隆編、建帛社、東日本大震災ボランティアによる支援と仮設住宅 家政学が見守る石巻の2年半、2014年、176
- 3)日本家政学会東日本大震災生活研究プロジェクト著、(一社)日本家政学会、炊き出し衛生マニュアル、2014年、24

〔その他〕

報告会

- 1)日本家政学会 東日本大震災生活研究プロジェクト報告会ならびにポスター発表、2015年10月12日、石巻専修大学
- 2)日本家政学会パネルディスカッション「生活復興と家政学 今後被災地をいかに支援するか」日本家政学会第67回大会、2015年5月23日、盛岡アイーナホール
- 3)東日本大震災生活研究プロジェクト報告会、日本家政学会第66回大会、2014年5月25日、和洋女子大学
- 4)東日本大震災生活研究プロジェクト報告会、日本家政学会第65回大会、2013年5月18日、昭和女子大学

<http://www.jshe.jp/disaster/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大竹美登利 (Otake, Midori)
東京学芸大学 教育学部・教授
研究者番号 40073564

(2) 研究分担者

坂田 隆 (Sakata, Takashi)
石巻専修大学・理工学部・教授
研究者番号 00215633
山崎 泰央 (Yamazaki, Yasuo)
石巻専修大学・経営学部・教授
研究者番号 10387293
加藤 浩文 (Kato, Hirofumi)
東北生活文化大学・家政学部・教授
研究者番号 20296023
萬羽 郁子 (Bamba, Ikuko)
東京学芸大学・教育学部・講師
研究者番号 20465470
野田奈津実 (Noda, Natsumi)
尚絅学院大学・総合人間科学部・講師
研究者番号 20615819
小川宣子 (Ogawa, Noriko)
中部大学・応用生物学部・教授
研究者番号 30139901
久慈 るみ子 (Kuji, Rumiko)
尚絅学院大学・総合人間科学部・教授
研究者番号 40153291
生田英輔 (Ikuta, Eisuke)
大阪市立大学・大学院・生活科学研究科・講師
研究者番号 50419678
吉井美奈子 (Minako, Yoshii)
武庫川女子大学・文学部・講師
研究者番号 60413481